

大久保和郎訳

地球壊滅



一九八六年「ゼロ時」

地球壊滅

一九八六年

「セロ時」

G
ミンタイン
ホイサー

大久保和郎訳

朝日新聞社

減 一九八六年「ゼロ時」

G・シユタインホイザー

大久保和郎

装幀者 鬼沢 邦

illustration 辰巳四郎

発行 昭和四十九年七月二十日 第一刷
昭和四十九年八月三十日 第二刷

発行者 朝日新聞社 岡見 璋

印刷所 共同印刷

発行所 朝日新聞社 東京／大阪／名古屋／北九州

定価 一〇〇円

0097-254222-0042

●大久保和郎（おおくぼ・かずお）
一九二二年東京に生まれる。慶応大
学文学部中退。仏・独文学専攻。
主なる訳書
スタンダール『赤と黒』、『バルムの
僧院』、『ピエール・ブール』、『四日』、
マリアンネ・ヴェーバー『マックス
・ヴェーバー』、『アーレント』、『全体主
義の起源（I）』、『ツヴァイク』、『心の
焦燥』

●目次

最後の避難所——島	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年九月二十日	5
世界滅亡との競争	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十月一日	15
磁場が消滅するとき	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十月十五日	26
無からあらわれた人間	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十月二十日	41
マンモスの屍骸と気球	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十月二十八日	51
「殺せ——殺せ！」と狂人たちはわめく	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十一月二日 <small>（フレイヤン）</small> 方靈節	57
ロビンソンたちは生き残るすべを学ぶ	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十一月十一日十一時三十五分	61
スリラー映画が現実となる	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十一月十二日	67
何びとも前途を見ようとしなかった	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十一月十七日	72
ピエール・ブランシャールの飛行	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十一月二十三日	78
一大陸のための鎮魂曲	●シユパルデンシユタイン城	●一九八七年十一月二十四日	83

- ナイロン、火酒、死んだ少女たち ● シュバルデンシユタイン城 ● 一九八七年十一月二十五日 86
- レールの上の無人列車 ● シュバルデンシユタイン城 ● 一九八七年十二月十二日 90
- 漏斗状渦巻の謎 ● シュバルデンシユタイン城 ● 一九八七年十二月十九日 101
- 「CATOII」基地応答す ● シュバルデンシユタイン城 ● 一九八七年降誕祭 113
- 火山、機、新しい地理学 ● シュバルデンシユタイン城 ● 一九八八年一月三日 119
- 「ウルティマ・トゥーレ行動」発動 ● シュバルデンシユタイン城 ● 一九八八年一月八日 122
- 一回分のケロシン ● シュバルデンシユタイン城 ● 一九八八年一月二十四日 137
- かつてアルプスのあつたところ ● CATOIIへの機上で ● 一九八八年一月二十五日 141
- コンピューターと自殺 ● CATOII ● 一九八八年一月二十七日 146
- 「クロコダイル」シュバルデンシユタインを救う ● シュバルデンシユタインへの途次 ● 一九八八年一月二十八日 157
- ドーナウ河への決死飛行 ● シュバルデンシユタイン城 ● 一九八八年一月二十九日―二月五日 163
- ニーベルンゲンの足跡を追って ● ペヒラーン ● 一九八八年三月三日 172

- カルヌントウム漂着 ●「マリア・テレージア」の船上で ●一九八八年三月十一日 179
- MORTURI TE SALTANT ●カルヌントウム／某所 ●一九八八年三月八日 193
- 草原の怪物 ●ヴィーン近傍 ●一九八八年三月九日 196
- 最後のジブシーの王 ●レオポルトツベルク ●一九八八年三月十二日 208
- 人食い人種との闘い ●レオポルトツベルク ●一九八八年三月十五日 228
- 死者の都市を蔽う焰 ●ヴィーン ●一九八八年三月十六日 231
- 「フランツ・ヨーゼフ」の帰還 ●レオポルトツベルク ●一九八八年三月十六日 239
- レオポルトツベルクでの別れ ●レオポルトツベルク ●一九八八年三月十七日 246
- 失われた時代の決算表 ●ドーナウ河畔ベヒラーン ●一九八八年三月十九日 248
- かつて北極のあったところ ●シュパルデンシュタイン城 ●一九八八年四月十六日 258
- 二羽の鷲鳥と一隼の希望 ●シュパルデンシュタイン城 ●一九八八年四月十八日 263
- 異なる時代からの来訪 ●シュパルデンシュタイン城 ●一九八八年四月二十日 268

パドカーメンナヤ・トゥングスカへの積荷 ● シュパルデンシュタイン城 ● 一九八八年四月二十二日

パリ最後の日々 ● シュパルデンシュタイン城 ● 一九八八年四月二十三日

新しい世界のためのプログラム ● シュパルデンシュタイン城 ● 一九八八年四月二十四日

残ったもの ● シュパルデンシュタイン城 ● 一九八八年四月三十日

一九八六年「ゼロ時」

主要登場人物

シュバルデンシュタイン・グループ

G・シュタインホイザー、その妻ゲルトルーデ、その

息子アレクサンダーとヨハネス——イェリネク博士

——フランツィ・ノイナー——フェリー・ジュースパ

ウアー——ヒューバーおやじとその妻、娘マリーア

——ピエール・ブランシヤール——ヤロスラフ

ノヴァヴェスの女たち

ヴェーラ、ヴラスタ、ヨヴァンカ、オルガ

C A T O I グループ

デュルファー教授——マツキンツシユ大佐——ア

ーヴィング博士——ベイカーブル教授——チ・ペイ

フエン教授——ヴォルコフ教授——シエレスト教授

——ド・ラ・ローズ博士——ラ・ファイエット博士

ジプシー・グループ

ヤーノシュ・ケーダ、グリーシヤ、グリージー——ツ

インガラ婆さん

監視艇「ボチヨムキン」グループ

チェルヴェンコフ艇長——モライ博士——ドミトリエ

ヴィツチ——イリーナ・セミョーンスカヤ

「エテルネル・ルトウール」グループの飛行機「スー

パー・ヘラクレス」の乗員

フランソワ——クロード

時——一九八六—八八年。ただし今日の世界情勢の分

析からすればそれより数年早いかもしれない。

筋は全くフィクションである。文中に引用されてい

る文章や日附は今日の科学の状況に対応している。

「目下の地球上の状況を見ると、この惑星における生物学的過程との関連においては、人類は瘡疾患に非常に似ていると私は思わざるを得ない。人類は無制限に増殖し、いたるところに副次的な腫瘍を作り(転移)、全体のオーガニズムを毒している。

このような場合、人間を治療する医者なら誰でも徹底的な手術をすすめるだろう。もし『自然』に法則もしくは理性のようなものがあると認めるとすれば、自然の全体的発展——進化——というものを見れば、まことに論理的に思えるが」とすれば、自然がいよいよそのような手術に——自然に死の脅威を与えている疾患の除去に——とりかかるべき時が来たといえよう。その際メスが患部だけではなく、健康な部分をも大量に除き去ることは避けがたい。それは生死を賭けた手術となろう。」 (一九七三年の著者のメモ)

最後の避難所——島

シュバルデンシュタイン城

一九八七年九月二十日

ほんとなら昨日は私の誕生日だった——五十七歳の。しかし今そんな計算をするものがあるだろうか。今の新しい時間の数え方によれば、私は（ここに居るほかの連中と同様に）やっと生後一年五ヵ月と四日なのだ。去年の四月十六日、われわれが三台の車と七人の人間とともに出発したとき——この森林地方へ、私たちの城へ——すべては始まったのだ。私の記憶が正しければ、オーストリアの東部に有史以来はじめての激烈な地震が起つたのも四月十六日だった。後に私たちが「ゼロ時行動」という名称を与えたあの計画は、あの日私の心に生れたのだ。

それからおよそ三年後、私は最後に残つた金をはたいてこの城を買つた。妻は格別感激しなかった。ヴィーン市内

の地所でも買つたほうが彼女にはよかつたのだろう。しかしあの時が好機だつたのだ。

肥つた家畜商人は、城の廢墟とともにフォン・シュバルデンシュタイン男爵という称号をも受け継ぐことになるという前所有者の口車に乗つたのだが（そのことをこっそり私に白状したとき彼の顔は蟹かにのように赤くなつたが、その色を私はいつまでも忘れないだろう）、彼の言うところの役にも立たぬ「石の塊り」を売り飛ばすことができたというので彼は大満悦だつた。そんな廢墟などは瀟洒なバンガロウの時代にあまり受けてはいなかつた。ところが、今残つているのはほとんどその「石の塊り」だけなのだ。だがシュバルデンシュタインは最も住み心地のいい快適な廢墟の一つだろう。

外からは、雨風にさらされた石壁と戸のはまつていない窓の穴しか見え、正面の門を抜けて来ると石壁から落ちた屑が積り積つているのしか見えないが——しかしその次に内門があつて、これはきちんと閉ざされている。そこらをつうつて見ているかもしれないか、つばら、いにとつて、城はどう見てもあまり仕事の仕甲斐のありそうなところには見

えない。もしそいつの好奇心が強すぎたとすれば、内側の防壁にまだ昔の銃眼がいくつか残っていて、騎士の間から古い弩おびかばかりか、新式の短機関銃の銃身をも、その銃眼から突き出すことができる。この上に塔が、天守閣がそびえている。どっしりとした塔で、ここでも地震があつたが、そのすべてに堪えて来たものだ。罅ひび一つはいっていない。昔はどんなに優れた石工や棟梁がいたことか！ それにまた、彼らは何と入念に敷地を選んだことか！

階段の厚い檜ひのきの板もやはり崩れなかつた。上の塔にある小窓は新しくガラスを入れたが、そばから見ても窓とはわからない。その窓の内側に、私とその前に坐る重い机があり、机の上には無線の機械がある。塔の縁にとりつけた無線のアンテナは枯れた小さな木のように擬装してある。

ここに人間がおり、物が貯えられ、武器が——いや、私と古くから愛用しているタイプライターまでが——あることは誰にも気がつくはずはない。

二日前、ここ数週間来はじめてのことだが、たつぷり雨が降つた。長い割目が走っている岩山イシノケ（割れ石）という名はこれに由来する）のそばの小川にはふたたび水が流

れ、人目につかぬようにしてある発電機の水車をまわし、そうして「大きな広い世界」——と、かつて何かの煙草の広告に書いてなかつたかしら？——とのわれわれの最後の絆である無線設備を動かしている。

ただし、階下の私たちの（居間）の照明には、私たちは灯油ランプあるいは蠟燭をも使っている。——私の息子たちが今のうちにこのような原始的な技術に慣れておくのは悪いことではない。無線（オーストリア陸軍は、もう無線などというものがなくなつて困っているのではあるまいか？）の電圧計が最低の目盛から上のほうへ動く。私はヘッドフォンを耳につけて、受信にスイッチを入れる。習慣から、そしてまた電気が流れ出したからだ。こうなつてもなお何か特別聞くことがあるとでもいうのか？

が、何かがある。私は微調整をまわした。すると発信者の声が弱く入つて来る。「……こちらはフライラッシングの OXKW ……受信可能な人には誰にでもお願いする……ここ隣の病院がある。チフス患者が十七人いるが薬がない。誰か助けてくれる人はいませんか……ザルツブルク方面行の鉄道はまだ大丈夫らしい。フライラッシングの町は

八十五パーセントは破壊されている。生存者はおよそ九十名、しかしおそらく皆放射線障害を受けている……。今の放射線量は……—フライラッシング O X K W、受信可能な人には……」

私は機械的に書き留めていた。これと同じような覚書はほかにもたくさんある。役にも立たぬ恐怖の覚書帳だ。たとえ私たちにその意志があり、葉があつたとしても、助けることはできないのだから。われわれとザルツブルク地方——フライラッシングもやはりこの地方の、かつてのドイツ国境の向う側にあるのだが——のあいだには、北から南にかけて広大な黄土の荒地が広がっている。ヴァルトフイ—アテル地方の山々の断崖から、かつてリンツのあつた地方をずっと越えて。それを横切つて行くためには駱駝らくだが必要だろう。だがどこで駱駝を見つけて来るのだ？

このことは、私の二人の息子ヨハネスとアレクサンダー、そしてイェリネク博士がようやく最近になつて確認したことである。彼らはレインジ・ロウヴァーに乗つて突進を試みたのだが、四輪駆動百八十馬力のこの車をもつても立往生してしまつたのだ。彼らが見出したのは死んだ

地方だった。黄土、粘土、砂——夏のスーパーストーム（この現象について私はこれ以外の言いあらわし方を知らない）がシベリアから、あるいはサハラからこちらへ吹き寄せて来たものが積つて丘陵をなしているのだ。しかも二十四時間のうちに。昔なら、そんなことは地質学的に言つてあり得ないと人々は言つたろう。だがこの嵐は現実だった。数万年前にも同じようなことがあつたはずである。ド—ナウ河沿いにレンスと粘土の丘が出来た頃のことだ。後に人々はこの丘を掘つてすばらしい葡萄酒倉を作つた。ところで、今また事態はそういうところまで行つてしまつているのだが、今度も誰かが新しい土の上に葡萄酒の株を植え、地下酒倉を作るだろうか？……

葡萄酒といえ——上等のよく冷えたのが三樽、まだ私たちの塔の一番下の穴倉にしまつてある。いわば思い出として、そして特別なことの起つた場合の薬として（私はしばしばその特別なことを起す）。ビールのごとは私は全然考へる勇気がない。で、私は物凄く匂いのする火酒を冬のあいだに間に合せの蒸溜器で作つてみた。あきらかに最初の蒸溜分も後の蒸溜分も、いやに多量のエ—テルのような

匂いのするフーゼル油も混り合ってしまったが。今「冬」と言ったが、勿論これは本来の意味ではなく、単に曆の上でという意味に取らなければならない。四季はまったくごちゃ混ぜになってしまったからだ。或るときは数メートルに及ぶ雪の下に閉じこめられて、ヒューバーのおやじの家に行くにも、半ば崩れ落ちた城の忍び廊下を通るほかはない。この忍び廊下はヒューバー家の牛小屋のそばで終わっているのだ。また或るときは洪水に囲まれてしまう。かと思ふと、また突然猛暑が始まって数週間もつづき、森は干上がり、やたらに多い落雷でほとんどかならず山火事が起る。雷雨はいやというほどある。この車軸を流すような豪雨がなかつたら森の木々はずつと前になくなっていたらう。ちようどまた雷雨がやってくる。孤立したフライライツシングからの送信者は沈黙してしまっている。私はアースを切る。

勿論こうしたことすべては何の意味もない。私たちはヴーンなりミュンヘンなりベルリンその他の都会なりの残骸がまだ地上にあるかどうかも全然知らないのだ。これらはすべて今は名にすぎない。無線の受信はいつまでもつづ

く磁気嵐によってほとんど絶えず妨げられている。「オーストリア高等学校用物理教科書」(一九六七年度)を頼りにこしらえた原始的な六分儀で、私は最近、昔の帆船の船長がしたように私たちの「位置」を測定してみようとした。ところが——勿論私が間違っていることはあり得るが——全然狂った数値しか出て来ないのだ。数値が正しかったとすれば、私たちは城もろとも、そしておそらく城が立っている古くからの敷地もろとも、北のほうへ優に百五十キロ、西のほうへ二百キロから三百キロ移動したことになる。すくなくとも地球上の大陸のいろいろの部分がかさまよい動きまわっているらしいのだ。かつて大陸漂移説を展開したアルフレート・ヴェーゲナーがこれを見たら大喜びをしただろう。

どのようにして振子が逆に動いてすべてが旧に復するか——誰がそれを預言し得ようか？　そしてそのとき、変ってしまった地球にどんな生き物が住み、その地球を支配するだろうか？　人間の突然変異体か、それとも……？

私は何年も前に聞いた或るテレヴィ講演を思い出す。爬虫類、つまり蛇や蜥蜴などは、高級な生体としては、強度

の放射線に長期にわたって耐え得る唯一のものであり——それ故彼らはこれまでも、ちょうど今ふたたび起っているように、地球磁場のマントが一時的に破れて、太陽や宇宙からの強烈な放射線のために動植物界に世界的な規模で変化が生じたとき、そうした宇宙的なカタストロフィに何度となく耐えて生き伸びて来たのだ、そういう話だった。

それにしても、この点に関しては私は不思議でならない。偶然われわれは途方もない幸運に恵まれたのか、でなければ原始岩層は、そして特に大きな深い森林は、以前には知られていなかったような強力な遮蔽的效果を持つのだ。とにかく、目下われわれのところでは放射能はほとんど正常に復している。

これまでいつもそうだったのだ。前年、地球の磁気の傘が決定的に引裂かれ、想像もつかぬほどの放射線の嵐が最後の防護幕である大気圏を貫いて襲ったとき、私たちは何日も、いや何週間も厚さ数メートルに及ぶ石壁や岩壁の下の地下室にうずくまって待った——荒れ狂う自然の暴力の終熄を、もしくは私たちは自身の終焉を。

ただの煉瓦やベトンの壁のかげにいたものは死んだ。私

の息子のヨハネスと、当時逃避行の途中を私たちが拾い上げたノイナー少年（彼はヨハネスの学校友達だ）、この二人の数学と物理の優等生は、もうずっと前に、ヴィーンで私の暗い預言を聞いて、イオン式遮蔽器とやらいうものを作り上げていたが、これは（彼らの主張によれば）小範圍内ならば比較的わずかなエネルギーで、鉛よりも強い放射能遮断効果を持つということだった。

この少々ポップス的で未来小説的に見える機械は、二つの前後に連結した自動車のバッテリーで給電されてぶずぶずと音を立てたが、とにかくそれは非常に頼もしい感じだった。——そして後になって二人の高校卒業生は、これ私たちの命を救ったのだと主張した。それがほんとかどうかは私にはわからない。私は門外漢だから。彼らの説明が私に多少納得が行ったのは、以前地球に帰る宇宙飛行士の乗ったカプセルが、空気層突入の際イオン化された分子に包まれ、この分子が外界とのあらゆる接触を遮断していたということがあったからにすぎない。若い二人の作ったものも同じような原理で働いたのだろう。——もしかすると、これも明日の技術のなかに含まれるものであるかもしれ

れないではないか。

とにかく、私たちは皆放射線障害を受けていなかった。それにまた、農夫ヒューバーの牛のうち、牛小屋の厚い藁の上、あるいはまた、打穀場の乾草の下にいた三頭はまったくびんびんしていたのに、開けた牧場にいた二頭はひどくやられていて、これではそのミルクも肉も使いものにはなりそうもない。また、放射線の襲撃のとき、密生した森のなかにいた鹿や野呂鹿や兎も今のところ何の変化も見せていない。奇妙なことだ。――藁と柴には「悪霊」を防ぐ効果があると主張する年取った農夫たちが正しいのだろうか？ 今はもう最悪の時は過ぎたように見える。まだガイガー・カウンターのかちかちという音が時に強くなることもあるが、多分それは目に見えぬ原子雲が中国もしくは太平洋からこちらへやって来るときだろう。

この前の狂気の戦争の前には、あちらには何億の人間がいたのだろうか？ 十四億、あるいは十七億？ フランスのアマ無線家のきれぎれな交信（彼らがその情報をどこから受けたのかは知らないが）から私が聞取ったところでは、インドの一部は地図の上から消え去ったようだ。西ヨ

ロンプの沿岸地方が上って来る海のなかにゆっくり沈んで行っているという話も聞いた。さなきだにあちらではもうほとんど人間がいらないのだから、それもまたどうでもいいことだ。南アメリカの西岸は一連の火山になってしまったという。――これは南アメリカ大陸もふたたび動きはじめたという兆候だ。

「パンタ・レイ」（万物は流転する）とギリシャの哲学者ヘラクレイトス——時の人はその思想の晦渋さの故に彼のことを「暗い人」と呼んだ——はかつて言った。彼がそう言ったのはいずれにしても正しかったのだ。

一事だけははつきりしている。食糧および人口の問題が、今は国連の会議がなくても解決してしまっていることだ。もはや誰も飢えていない。飢えた人々は死んでしまったのだ。

私が死ぬとすれば、誰を、何を残して行くだろうか？ 今十八歳と二十一歳の二人の息子だが、そのうち一人は多分永久に独身でとどまるだろう。あまり年を取っていない女性などはどこにもいそうにないからだ。ヒューバーおやじのところのマリーアは、この春私の長男のアレクサンダ